

「寺と社会」を考える

——もし、自分のお寺が避難所になったら——

石原 顕 正

今年も日本各地で、過去の経験やデータをはるかに超えた、異常気象によって大きな被害が発生しました。さらに世界中で起きているさまざまな気候変動関連の自然災害は、干ばつ、洪水などを引き起こし、水不足、食糧不足により飢餓・貧困が生まれ、果てには紛争の要因の一部といわれています。これから将来、地球全体の異変はさらに深刻な事態となり、自然の猛威は人間社会にさまざまな影響を与えることでしょう。私たち宗教者もこうした現実に対し、社会的課題として積極的に取り組む姿勢が求められています。私もこの二十年間、さまざまな災害現場での救援・復興活動に関与し、宗教的取り組みや防災に対する危機管理の必要性を学びました。

1、社会的背景（寺と社会の関係）

一九九五年、戦後五十年目の節目を迎えた、一月十七日、「神戸の街並みが一瞬にして崩壊炎上し、阿鼻叫喚の巷と化す」と言われたように、阪神・淡路大震災が発生。震災によって多くの尊い命が犠牲となり、人間の生きる意味さえ失われる事態に、私は現場に駆けつけ、悲惨な現実を前に、ただ、ただ怒りと悲しみがこみ上げ、「無常感」だけが強く感じられたことを今も覚えています。

震災以来、地元被災地の皆さんの懸命な復興への努力、全国から一〇〇万人とも言われた善意の支援は、慣れない

ながらも、「災害救援活動」として当時の社会現象ともなりました。

当時、山折哲雄氏は「宗教は大震災を前に沈黙した」と評されたが、その中には確かに多くの宗教者たちが積極的に人道援助を展開していました。こうした社会の動きと共に各宗教団体や教師の取り組みが本格的に始動し、重要な社会貢献として注目されるようになりました。

震災後まもなく、世間の悲しみをよそに三月二十日、「日本の安心・安全神話の崩壊」を象徴するような、オウム真理教の「地下鉄サリン事件」が起き、社会的に大きな衝撃を与えました。

「日本の寺は風景の一部でしかなかった」というオウム信者の、宗教に対する満たされない心の叫びが大きく反響を呼びました。それは何を意味していたのか。当時の日本が世俗化し、宗教、教えそのものが形骸化し、社会のニーズに十分に応えることができなかつたからでしょうか。この深層は今後に大きな課題を残すことになりました。

現代社会においては、私たちは災害時をはじめ、社会的困難に対する宗教救済の実践が求められ、寺院は、地域の防災資源としてさまざまな役目を果たすことが改めて期待されています。さらに教師や寺院婦人が防災や支援に関する知識や実践を身につけ、被災時のリーダー的存在になることが求められることでしょう。

しかし、現実はどうだろうか。「社会」について宗教の内部から考えてみると、その宗教の教義や布教の方法をもって宗教活動することはあつても、社会の困難を克服するための宗教的可能性、寺院としての機能を活かす取り組みはまだ少ないのではないのでしょうか。

災害時には、眼に見える風景ばかりではなく、社会的機能をはじめ、あらゆるものが根底から失われます。当然、被災によって当たり前の日常が寸断され、大きな人的被害や避難を余儀なくされることが予想されます。災害はいつ、

どこで起こるかわかりません。その時、あなたは「自分の命は自分で守れますか」まず、我が身の安全が確保されなければ他者への支援は始まりません。

2、「もし、あなたのお寺が避難所になったら」

たぶん、皆さんは「うちは無理です」「来ないで」と心の中で叫びたくなるでしょう。

万一、大勢の人たちが「お寺にただれ込んでくる」ような事態になったらどうしよう。

そんな夢物語のような話が現実になるのです。

「公的避難所が指定されているのに……」と、思われるかもしれませんが、想定外の範囲を超える緊急事態には、様々な障害によってどうしても対処しなければならぬ事態が発生します。

これまでも多くの被災地で避難者が行き場を失い、お寺に居場所を求め避難生活を続けた現場を目の当たりにしてきました。

災害時にまず必要なことは、寺のスペースを開放したり、備蓄を提供することだけではありません。現実には被災者を目の前にして、本当に求められるものは、精神的支えであり、被災者を理解することは、体力や時間以上に創意工夫が必要でした。

もし、「自分自身が被災したら、どんな救援を求めただろうか」そう考え始めると、相手は被災者という集団ではなく、一人一人の個人であり、一つ一つの家族であることに気づきました。傷ついた人々こそ、自分を大切にしてほしい。尊敬してほしいと思っています。私たちの真の仕事、役目とは、被災者一人一人に、まず人間の尊厳を見いだすことが求められます。

支援者の大半は、己の行為に満足し、気持ち良い疲労感は、「してあげた」という快感を伴っていました。しかし、私たちは、一時の同情や涙ではなく、個人的な支援の誘惑を捨てて、対等な関係で被災者と向き合うことが肝心です。まず、お寺にとっての「災害対策」とは、

『一般人とは違い被災者にならない』こと。

当然、被害は一樣に受けて被災はするが、みんなと一緒に避難所に避難しているだけでは、お寺としての立場が埋没し、宗教者としての使命を果たすこともできなくなります。予めいち早く地域に貢献できる準備をしておく事が重要です。

寺院の建造物は、貴重な歴史的遺産（レガシー）が多く、自ら被災し損傷することも考慮しなければなりません。堂塔伽藍はじめ、ご尊像、位牌、荘厳具の転倒、落下の防止。山門、鐘楼堂、石塔、扉などの倒壊に備え、事前の点検、改良が必要となるでしょう。

3、支援の拠点となる

阪神では、壊滅的被害を受けて埋没する寺院もある中、すべてのライフラインが止まり、自坊が被災しながらも避難者をはじめ、全国から駆け付けてくれた多くの支援者を受け入れ、救援活動の拠点として機能していたケースもありました。連日、求めに応じて亡くなられた犠牲者への読経、回向など宗教的使命を果たし、さらに支援者と共に多

くの被災者が避難する学校の校庭、公園などへの炊き出し、支援物資の調達配布などに奔走する日々が続きました。北海道、有珠山噴火の際には、町役場はじめ行政機能が他の地域に移転避難する中で、教会の施設に避難者を収容し、公的支援や外部の支援など届かない状況の中、自らすべてを提供し、寒さをしのぎながら孤軍奮闘する教師の姿があった。

新潟の場合、住職が法務など外出時に地震が発生し、やっとの思いで寺に戻った時、被災した自坊を目の当たりにして途方に暮れてしまった。「気がついたら自分自身が、被災者になっていた」と、お上人は実感を語ってくれました。

その後、本格的に現地拠点として、外部からの支援者の衣食住を担いながら、避難者への支援・サービスは檀信徒対象に止まらず地域全戸への活動に拡大し、気が付けば自らの痛手を忘れるかのような多忙な日々を過ごすことになりました。

さらに、NPOなどの支援を受け、さまざまに戸別支援の機会を通して被災者との信頼の絆を結び、被災により、すでに中止が決定していた地域の「夏祭り」の開催をお寺が先導し、地域住民と一体となって復興に向けての取り組みが実現しました。

4、お寺の「備災」を考える

お寺が避難所になったら

いきなり、「お寺が避難者になだれ込まれる事態」を避けるためにも準備を怠りなく。

いざ、という時のための【防災寺族会議】を実施しましょう。

まず、住職、教師はじめお寺にいる寺族全員の理解、協力が不可欠となります。さらに檀信徒、地域の人々との連携や、日頃から危機対応能力のある（マンパワー）人材の確保、協力が得られることが大きな地域貢献への資源となります。

・ 社会活動を開始するための覚悟が必要。

・ 日頃のお寺と社会との付き合いによって、どれだけ必要な情報が集められるか。

・ お寺として求めに対応して、救いの手立てを実践する事ができるか。

・ 地域の地形や環境などさまざまな要因について検証し、自坊でのリスクや危険度を把握する。

・ 自坊に避難者の受け入れが可能かどうか、事前に意思決定を。

お寺が避難所となれば、日常の法務に加え、宗教的求めに応じ、亡くなられた犠牲者への読経回向をはじめ、時には葬儀を依頼されるケースも発生するでしょう。さまざまな事情をかかえる被災者に寄り添いながら、悲しみや不安を和らげ、共に現実を克服するためには手間隙を惜しまず対応することが求められます。生存者への衣食住をはじめ、情報発信、救援物資の補給や調達などに追われ、さらには行政との連携、外部からの支援組織、支援者との調整も不可欠となります。

住職（宗教者）として宗教面で関わる一方、お寺のどこまでを開放すべきか判断を迫られることもあり寺院施設の管理者としての立場や、寺族との暮らしを確保するなど、それぞれの役割を担うこととなります。被害の程度や公的避難施設の状態によっては、避難や支援が長期化することも予想されるため精神的ストレスや、経済面での負担も覚悟しておかなければなりません。

突然の災害に、お寺に人がなだれ込むというより、私たち自身が「災害に飲みこまれない」ための備えが絶対に必

要であり、災害時にこそ、お寺は常に「人が生きる場所」、「救いの拠点」として機能することが期待されています。すべてを失った悲惨な人々の「心の叫び」を受け止め、「心をうめる」救いの手立てが宗教力となるよう、宗教者自身の真価が問われることになるでしょう。

近年SNS等により、地域内限定ではなく広く全国、世界に向けて情報を発信し支援を求めることが可能になりました。今回の熊本地震でも現地のお寺が現地拠点として、国内外から多くの善意を頂き、現在も被災地でのさまざまな支援を展開しています。皆さんもこの機会に、新たな社会との関わりを考え、人と人との絆を広げてみませんか。

ご静聴ありがとうございました。